Mar. 17
1888
no. 101

明治廿一年三月十七日發兌

THE WOMAN'S MAGAZINE.

女學雜誌

東京女學雜誌社

一冊五錢 府内無稅 郵稅一錢 每土曜出版

第百一號

社説
日本の家族(第六)
家族幸福の根底
論説
告別之演説(植村正久)○小兒の精神
及保護法(榊俶)
叢話
からだの持方(加藤
弘之)○釣瓶のあ
さがほ(一のぶ)○
生死○百人一首一
口話(鈴木弘恭)
批評
浮雲○女子教育論
小説
小説神髄
佳傳
レデー、ラッセル
寄書
中島俊子吟作○感を
記す(太田きん)
小供の話
不思儀の新衣裳
新報
海外女報
附錄
和文學講義(鈴木弘
恭)

鈴和堂中川昇刻

[illegible]二〇三一一五

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

附錄　和文學講義

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 101, MARCH 17TH, 1888.

第百號

EDITORIAL:— Family Life in Japan : No. VI. (The Secret of Happy Homes).

LEADING ARTICLES:—A Farewell Speech by Rev. M. Uyemura : The Child's Brain and How to Protect it, by Prof. S. Sakaki.

MISCELLANIES:— How to Preserve Health, by Senator H. Kato : Life or Death : An Old Poem in a New Dress.

CRITICAL NOTICES:— "Ukigumo" (The Floating Cloud.) ; "Joshi Kyo-Iku Ron." (Educationale De Femme.).

NOVELS:— Bouquet of Novels. (Scott's Kenilworth : No. VI.).

BIOGRAPHIES:— Lady Russel.

CHILDREN'S COLUMN : — Emperor's New Cloth.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

●社說　日本の家族第五（之を幸福にするの策

●論說　小兒の精神及保護法（榊俶）

●批評　浮雲○谷間の姬百合○婦人敎會雜誌○結婚の枝折○いらつめと女學雜誌

●叢話　萬國婦人禁酒會員の請願書○御身の務○生死○百人一首一口話（鈴木弘恭）○古はなし（高橋愚）

●小說　小說神髓蘇格氏ケニルヲルス第五回

●佳傳　ビーチエルストウエ

●寄書

●新報

●海外女事

●小供のはなし　不思議の新衣服

●廣告

●珊瑚の珠　（第五十七回）

河中之水歌　　齊　武帝

河中之水向東流。洛陽女兒名莫愁。莫愁十三能織綺。十四采桑南陌頭。十五嫁爲盧家婦。十六生兒字阿侯。盧家蘭室桂爲梁。中有鬱金蘇合香。頭上金釵十二行。足下絲履五文章。珊瑚挂鏡爛生光。平頭奴子擎履箱。人生富貴何所望。恨不早嫁東家王。

長干行　　唐　李白

妾髪初覆額。折花門前劇。郎騎竹馬來。遶床弄青梅。同居長干里。兩小無嫌猜。十四爲君婦。羞顏未嘗開。低頭向暗壁。千喚不一廻。十五始展眉。願同塵與灰。常存抱柱信。豈上望夫台。十六君遠行。瞿塘灔澦堆。五月不可觸。猿聲天上哀。門前建行跡。一一生綠苔。苔深不能掃。落葉秋風早。八月胡蝶來。雙飛西園草。感此傷妾心。坐愁紅顏老。早晩下三巴。預將書報家。相迎不道遠。直至長風沙。

題しらず　　よみ人しらず

秋あらでおく白露はねざめするわが手枕のしつくありけり

今はとて君が枯あば我やどの花をバひとり見てやしのバん

女學雜誌第百一號
明治二十一年三月十七日發兌

社説

○日本の家族

（第六）家族幸福の大根底、

家族の銘々が能く其一家内たるもの丶心得を守る事、及び、家内從來の仕組を改ため族制の上に多少の變革を爲す事、以上二つは眞とに日本の家族を幸福にする當今切要の良策たり然れども更らに一つの尤も忘るべからざるものあり思ふに是れ惣べての家族を幸福にするの大根底なるが故に茲に之れなくんば二種の改良策ありと雖も無效に屬すべき也。そも／＼一家の根本は夫婦に在り夫婦相思の愛は即ち一家和樂の大根底たるなり。故によしや一家族の銘々が或は互に忍び或は互に助けて所謂る家内結合の爲に必要なるもろ／＼の心得方を盡し了するとも若し其根本たる夫婦兩人の交際にして清潔親密ならずんば之れ果た何の效あらんや、又よしや親子別居し伉儷只だ差向ひと爲り外に遠慮會釋すべき心配のものもなくして自由に一家を持たらんとも若し當の夫婦相互の間だ面白からずんば之れ亦た何の效かあらん。蓋し衷情相ひ信じ愛念禁じ難き夫婦が只だ家族の手前を憚かりて特更らに冷淡無情を裝はふもの固より悲むべし、然れども表てに冷淡無情にして衷心に相ひ信愛するの夫婦は其一瞥片言の間に於て尚ほ互ひに慰さむる所あり、彼の外面の無情冷淡と共に内心も亦同樣に冷淡無情を極め妻にして夫を信ぜず夫にして妻を愛せず只だ人世の習慣に繋がれて餘儀なく夫婦となれる如きものあらば之れ尤とも悲むべきなり、如此き夫婦は夢にだも琴瑟和樂の幸福を知らず伉儷の縁は寧ろ不自由に之を束縛して反つて之れを不愉快にす則ち發して或は口論喧嘩と爲り或は放蕩亂暴となり或は蓄妾姦淫の大罪と爲るなり。そもそも一家の根本愛情の大根底たる夫婦の間だ柄にして既に如此くんば亦安くんぞ之が父母弟妹子孫等の和樂を望まん一家亂離滅裂之を何如にするも到底幸福なるホームを見ることを得ざるもの也。

吾人日本の夫婦を以て西洋人の夫婦に比較するに一は君臣の如く一は兄妹の如し日本の男子が其妻を見るは猶ほ五躰外の附屬物の如く西洋の良人が其細君を見るは殆んど一身同躰の如し一言するに我國の夫婦は義理人情を以て繋がれ西洋の夫婦は戀々たる愛情を以て相抱けるが如し。凡そ如此き相違を

來らすの元因は一にして足らす中にも男尊女卑の餘習に由る者社會從來の慣習に由る者の如きは共に何づれも其大元因中の一つにてはあるべし、然れども吾人が今ま其の大元因中の尤も大あるものとして認たむるものは即はち男女結婚の風儀の正しからざる事一夫一婦の規則の嚴密あらざる事及び離婚離縁の習慣の甚はだ杜漏ある事に在り。

思ふに今の日本の結婚法の如く不注意を極むるは文明國に多く類なき所ろならん蓋し婚姻の當夜男女初めて其人に接し兼て仲人の申條に相違したるを驚く如きは明治の時勢の有難さとして今日に略ぼ其跡を絶んとせり。然れども其代として寫眞の一葉、親睦會の一見、鹿鳴舘踏舞の一をどりによつて直ちに心中相許すが如きもの往々にして之れあり、又或は用意綿密なる母親の撰定を以て束縛婚姻の骨髓と爲し鼻に迷ひ眼つきを慕ひ愛慕情慾の奴隷たるを以て自由結婚の神髓と心得るものあり、彼等は合性の何たるを知らず、彼等は遺傳の何たるを辨せず、彼等は釣合和合の何たるを察せず、卒然として迷ひ卒然として決し則ち卒然として婚姻して瓢々熱海箱根に甘月遊を爲さば是れ西洋主義の結婚なりと思ふ惑へるも亦た甚はだしからずや。夫婦はお互ひに何如なる人物にてあれ好し人々の癖は凸凹の如く世間並みに外づれたるものにてあれ詮する所ろ相合して一躰とあり以て和合親密其の間だ殆んど水を漏すの隙なきを以て伉儷の上乘あるものとす然るに今の男女は丸にして四角に合し四角にして卵圓形に合するもの多し其の合して相ひ和樂する所の夫婦とならざるは實に止むを得ざるもの也。

夫婦すでに和樂せず即はち夫婦互ひに相ひ樂しむ所ろなし此に於てか夫は其身分に應じて或は家に妾と名くるものを置き或は外に外妾と呼ぶ所の者を圍ひ或は出でゝ花柳の巷に遊び流連して家に歸らざるとあり而して細君はぢつと之を辛棒し其の高尙あるものは夜半獨り歌を吟じ其の熱情のものは煩惱して胸に湯を沸かし稍や心得たるものは妾を妹分にし其の尤とも烈しきものは客氣の角を露はす則ち一家に蛇の如く相ひ戰ふものありて家族にもめの止む時あし、然るに尤も奇しむべきは現社會の評論なり彼は數年前に至るまでかの妾を二等親に置てれい〳〵たる一家族の公けの者と爲たり但し方今は稍や之を厭慮して法に之を許さずと雖ども其の實際に於ては尙ほ其の多きを以て一つの名譽と見做し妾幾人外妾何個所にありと聞く時隱然之を以て豪富を證するの符徵となし甚はだ

しきは流連放蕩を以て風流の餘事と心得其の樂を咏ずるを以て初めて唐詩の風韻を得たりと爲す而して細君は何も言はず之に辛棒すへし夫が姦淫を犯すを見て笑つて之を好遇するは則ち貞操の高きものなりと云ふに至る、之を以て姦淫の空氣上下に立こもり一夫一婦の情交殆んど消滅しぬ、凡そ夫は其の愛情の全躰を擧げて妻の上に置き妻は其の全心を盡して之を郎君の上に置き信愛尤も切に結托甚だ濃にして初めて夫婦和樂の幸福を得べし今の如くにして幸福ある伉儷なきは亦た實に止を得ざるもの也。

且つや今の離婚法を見るに殆んどこれ男子が其器物を放擲するに異ならず苟くも心に厭倦して之を好まざるに至れば則ち勝手に之を去つて搆ひなし而して勿論之に名義なきにあらず曰く家風に合はぬ曰く子を生むを得ず曰く當世の交際向に適せず曰く家政を知らず行儀宜しからずと大凡そ此等の事一種の自明眞理と爲つて世に之を爭うもの尠く斯くして之を去るものも人に愧ぢず斯の如くして非道に去らるゝ所の當人も亦爲ん方なきことゝアキラメ全く緣の無きものとして少さゝかも故障を述べず豈に驚ろくべきの怪事にあらずや。而して今の日本には離緣の權全く男子の上に在て毫末も女子の手中に存せず夫婦の法緣の斷續何如んは一に三行半の授受何如に因る、之を喩ふるに猶ほ下婢を雇ふ所の主人が下婢に暇を遣はすが如し旦那は之を許すの權あり妻は只だ之を請願する義務あり元來伉儷を以て君臣　主婢の關係の如く心得るが故に日本の女性は現に如此き悲むべき待遇を受るも尙ほ毫も怨む所なきが如し、左れば夫の不信切を申し立てゝ離緣を請はんに夫たるもの特更に意地を惡くして之を承諾せず而も之を里に歸へして扶持を送らず只だ三行半を遣はさずして久しく其再緣を妨ぐるものあり、而して其間己は妾を置いて勝手に淫慾を縱まゝにするも法の問ふ所にあらず但だ其妻にして若し此の如きことあらば直ちに之を訴たへて有夫姦の刑に墜いる、蓋し故意に如此き不信切を盡して其妻を苦しましむるもの世上に例なきにあらざるなり。嗚呼今の日本男子の不信切なること一に何ぞ玆に至るや　糟糠の妻も舊くなれば疊の如く之を更ゆるを好しとし三斗の收入あるに至つて妻を改ためざるは丈夫の勇なしと云ふ、大凡そ二つの者相合して一躰と爲る神の合せ玉ふものは人之を離つを得ずと信じ一夫一婦淸潔の交を結んで畢世同行同伴の樂しみを守るとを決心するものにあらずんば其の間柄の和　樂もとより覺束なき筈なり、故に今の如く離

婚の勝手自由なる世の中に於て眞正に幸福なる伉儷なきは亦實に止を得ざるもの也。

思ふに今の日本の夫婦の冷淡無情なるものは多くは右に言へる如き數多の弊害あるに因て然り、而して此の數多の弊害は其一つ或は因となりて他の弊害を來たし此の弊害時に因と爲つて亦更らに弊害を起す彼此相ひ入り亂れ互いに輪廻して其の因果を生ずるが故に一朝此等の弊害を除き去らんとせば亦た其三を併せて共に之を刈らざるべからず蓋し最初婚姻に輕忽なるが故に後に至りて離婚の不運を見ると一層に數多しと雖も、亦た離婚の甚だ容易なるが故に最初婚姻の事を左程に重んぜず若し適はずんば去るあらんのみと覺悟して初めより試みの爲に人生の一大事を決するの趣きなきにあらず、又婚姻の緣不出來にしてよし離婚の都合を爲す能はざるも別に妾を置き外に放蕩して其慾を慰さむるを得るが故に最初の緣談を鄭重にせざるあれば、亦た最初の緣談の疎鹵なるが故に他日畜妾遊樂の惡決果を生ずるとあり、如此く三つのもの互に關係して前後に相應じ以て益ます其弊害の毒を深ふするか故に吾人其の毒を洗て全く之を淸よくせんと欲する時は則ち亦た同時に此等の諸弊を矯むるの覺悟なかるべからず。

而して之を矯むるの策もとより多し、先づ社會の良心を發揮せしめて輿論に姦淫を惡むの善風を起さしむる事、政府の法律によつて離婚を嚴禁し別に離婚裁判所を設ふけて其止を得ざる者の制治を爲す事、淸潔なる男女の交際法を流行せしめて男女相擇むの途を安全にする事、凡そ此等は則はち其の矯正方中の尤も有力なるものなりもし幸ひにして此如き矯正方實行せらるゝを得て男女の間柄更らに淸潔善美なる境界に進み、先づ婚姻の事甚だ鄭重と爲り、一夫一婦の道德固く確定し、離婚の惡弊風大に減少するに至らば此等の諸の良元因は此度は亦た日本の夫婦を驅ていよ〳〵互ひに親しみ互ひに睦ましむるに至らん、蓋し彼等は初は止むを得ざるに由て更らに相親睦し、中頃は其習慣に由て更に相親睦し、後には愛情いよ〳〵熱して衷心尤も濃かに益々戀々の念を切にするに至り、一歩は一歩より信切にして歩々遂に眞實の境に達し日本の夫婦も亦た西洋人の伉儷に異らざるの趣あるに至らん。蓋し彼等の如く出入を共にし起臥を一にし勉强遊樂を同時にし歡喜憂苦を切半し一生相戀つて雍々和樂するに至らんと難にあらざる也」一家の夫婦すでに如此きか根本既に定つて幹枝の之に伴はざるはなし其愛情は波紋の如く及達して惣て

（四）

の家族を幸福にするのパン種となり玆に幸福なるホームを造るの根底固くして異日彼に馥郁たる愛樂の花を見るに至らんと必せり矣。

それ既に家族の銘々は其心得方を定めたり、既に族制の上に多少の變革を行ひたり、更らに其根元に遡ぼりて夫婦の和樂を損する所の諸弊害を除きたり、此上は即ち女性たる姉妹諸君が其全力を奮つて家族を幸福にするの責任とある彼處には既に十分の注文をなしたり此の上は諸君に重きを要するとも敢て無理にはあらず、蓋し一家の女王先づ動かずんば家族を幸福にするの改良策は朴然として悉く其精神を失ふべし。

論説

○告別の演述

植村正久　述

植村君はカアライルの徒なり道念高潔正義の理想尤も高し其の辨其文寸にして能く万義を含む平常吾輩の深く敬服する所ろ也此頃米國に趣かるゝに付き一日明治女學校生徒の爲に一場の演説あり左は即ち其の大意を筆記したるものに係る當日速記者に差支へありて細かに之を錄するを得ず社員後に至り只だ其の片々を記臆の中より拾ひ出して一文につゞり且つ成るべく其辨説の躰に調へたるものなり讀者須らく之によりて全躰を推すべし則ち之を以て其の全躰を寫すものと認め玉ふ勿れ。

二年もしくは三年の間だ、アナタ方にお別れ申しますから、何んぞお話して置たいと思ひまして、先達てロッェのミクロコスモスを讀みまして、男と女との相違の事を考へて之を申したいと思ひ、巖本君にも左様にお約束しましたが、能く考へますとドウモ少こし安からん所ろが、心に確かでない所ろがありますから、其をお話して万一あなた方を誤まらせては困りますから、今日は私が一點も疑れん所ろの、確かに信じて何卒あなた方に行つて戴きたいと思ふ所ろの事を、お話しようと思ひます。今まポールドの上に書いてあるのは、

I am. I ought. I can. I will.

の四つです。抑も人間は何である乎、手近き所ろには躰だがあります、又躰だよりも尊とい所ろの靈魂があります、而して此の躰だも靈魂も之は自から作つたものではなく、天然の力習慣の力によりて出來たものに違いない、啻に心の仕組躰だの有様が習慣の力によつて出來しのみならず、躰の持前、強き弱き、血氣の盛んな人、衰へたる人等は亦た多く習慣の有様

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

によつて出來たるに相違ない。西洋の諺に、親が酸い葡萄を食べれば子の齒の列らびが惡るいと云ふとがあります、即はち一の習慣が段々と其の決果を後に及ぼすとを云ふたものでせう。故に一代の中に犯したる親の罪は三代四代に及び、又た親の善き事は孫、ウマゴ、千代に迄でも及び子々孫々之を傳ふるものです、されば今日の私等の心や躰は、神が造り玉ひし時のまゝでハなく、いろ／＼と人間の働らきによつて斯くありしものです。一つの惡るひ僻でも必らず子孫に遺る、若しイッワリを云ふ所ろの親あらバ其の子供も亦たイッワリを云ふ。故に罪惡はたゞに我一身を害するのみならず後世迄でをも害するとを記臆せんければならん。實に人間は其身を取卷く所の有樣によつて大に變ハるもので、社會の形勢、學校の空氣等は即はち皆な其元因となる、人は決して神が與へ玉へる所の儘ではなく自分の力によりて大ひに其の有樣を變ゆるものです、即ハち人間は造化の奴隷にあらず、自主自立の權あるものですから己の考へ次第によりて變化するとも亦勿論あるとです。あなた方は皆なそれ／＼に性質が違はるゝ、其中には善きもあれば惡しきもある、之は素より天然の儘に然るではなく多くは習慣と云ふとによつて出來たものです。故に我か、か、があると云ふと即ハち我の只今の有樣は一つは神の思召にも由るとなれども又一つには己れの事情就中己れの爲したる所ろの事によりて成りたるものです。そも／＼習慣とは自分の骨折、言行、動作等によりて出來たるものなるが之に二つの區別があり、一つはウケミにして一つは働らきかけてある、即ハち初めは聞くとが厭やであつたが段々と之を好むよふに成り見るもキタナイと思ふたものが段々と之を厭はぬよふに成る之は即ハちウケミの習慣であるが、初め爲しがたかりし善事も之を度々行ふときは遂に漸やく爲やすくなるの類は即ハち働らきかけの習慣であります。然るに人間は習慣の奴隷と爲り只だ今の儘に安んじて始終ウケミの方に立ち絶へて働らきかくる、即ハち新らたに習慣を造るの覺悟がなくては成らん。然し人間は迚も今の有樣に滿足するとが出來ぬ一歩でも先へ行たしと望む所ろの考がある、此の考はアイデアル即ハち理想と云つて誰にも必らずある、酒のみが酒を好むも一つには理想を樂しむのである、然るに人間は此の理想を善くし正しきアイデアル正しき規則を作りて目前に置き其身の習慣を段々と善い方へ導かんければならぬ、私は天然の勢によりて止を得ず斯うなつた之を如何んともするとが出來ぬと云ふは實

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に悪るひとです、どうしても目前の有樣よりも善い方へ進みたいと云ふとが無くては成らぬ。カントの言ふに平生心中に感歎と敬崇の念に堪へしむるもの二つ、一は星の燦爛たる天、一は道德の律法と斯く道德の律法を尊とみ其の出る所ろは天にあり之れ道なりと覺悟し此の道を以て習慣を導き惡を制し善を伸ばし未だ爲さぬ所ろの善あらは其善の方へ進み行かねばならぬ、人間ハ其有樣に惑弱して知らず識らず卑くあるものゆへ其理想を高くして我のつとむべき道は何れある乎を思はねばならぬ。カアライルは奇抜の言葉を云ふ人であつたが嘗て申すに、彼の二人を見よ一人は地を耕し一人は生命の力を得る爲に刻苦す此二人は正直に働らいて、義務を重んず我は此の二人を尊とむ義務を爲さぬ所ろの人は風前のもみ殼塵に均し。今日世を渡るときどのように身分が立派にならうと云ふと、名譽、よく思ハれようと云ふ事、樂な身分、等の望みは之を第二に置き先づどう云ふ樣にするが義務乎先つどう云ふようにすべき筈である乎と考ふべきとです。デムマルクのカロリンマテルダと云ふ皇后は殿中の四壁に立派な金玉を彫り眞に奢りを極ハめ華美歡樂を盡されたが或る時の祈の言葉に神よ願くは妾わに罪なからしめよ世に大きくあるとは之を他人に讓りたし妾は只だ罪なきものと爲らしめ玉へと、眞に何如に立派なる身分と爲るとも安心がない、一番の安心は即ハち無罪と云ふとでありませう、私共學生は藝をはげみ文事を弄あそびかのウラヤの人々よりも世の中に立て榮あるべきものではありますが、先づ我等はどれを先にすべき、世の寶を先にすべきか又は人間の道を盡すとを先にすべき乎、蓋しカロリンマテルダの祈りの如く心をけがし德を破りてエラクなるよりも先づ無罪あるが宜しひと言ふ決心が無てはなりませぬ(未完)。

○小兒の精神及ひ保護法　(其二)

榊俶述　佃與二郎筆記

只今まではハケ月位の小供ですが是れから十ケ月か滿一年位にあれは只落着ては居りません手足を動かすばかりであく這く々が始まり升是れは一つ所に何時までも居るのは面白くあい彼所に往たら面白いともあらふかと空の考から出のですが此が大事あとで動物には天性として動かざるを得ざる所がります然して這々が始まれは最初はたゞゴロツト寢て居のが朝から晩まで手足をバタ／＼して苦み居らち何ふ云桴子でヒヨツト起るとが出きればソレより工合を覺へて面白くなり母君

に吩附られずとも自身躬ら運動します何でも身躰を使ひませんと其使はない所だけが瘠せるので例へば手足の動かない病人などが其手足を抓まんで見ると骨と皮ばかりになります赤子も外の病の爲めに手足を使ふことをしませんと其部分が細ります故に既に這ふ小供は這はない小供に較比すれば骨も太り肉も着きます然し此這々をする頃が一番危險なので椽側から落るとか何か殪すとかいふことがあります此等は措て私の劍呑と申すのは齒の生る事であります皆さんも御存じのことではありませうが前齒は通例下から生ます此時は大變に赤子の御機嫌が惡るくなつて朝から晩まで泣き通し又少し御機嫌が克ければアー／＼と云て何でも口に入れ又は激しいのになれば穢ないお話ですが反吐ことなどもあり時々熱も出ます又殊によると大變に引つけることがあります此時は眼を釣上げて息を吸込んだきりで紫色の顔と變じ唇は眞蒼となつてグッと言たきりになり實に劒呑なる病氣で是れが爲めに直に死ぬものもあります又死なゝいにしても後に神經或は精神に關する病の前兆になつて居ります其れ故齒の生る時分には此事を餘程注意して小供が妙なことを始めアー／＼云とか寢ないとか言のを人に聞き又醫者に質さなければなりません。

此時が過ぎれば赤子は先づ安心であります此れから後は足の方が大層に太りますから起立が始まる其時に御兩親の歡び小供躬らの歡びも大層のことであります起た時の顔つきは笑を含んで如何にも嬉しさうな顔をして居ます其前につかまり立と云ふことを遣り升這て行く間に手の力がついて炬燵櫓とか障子とかにつかまつて漸くに立つ併し此時は未だ立ッたと云ふ名ばかりで歩行くことが出きませんで直に殪れる殪れても終日之れを職として綱渡りをする樣に知らずに手を擴げて調子をとり敎へる人もありませんが自分の考で起つことになります遂には殪れぬ樣にもなり歩行くことも出きる樣になり升。

此起つのと同時に言葉が出きて來ます前ヱ申したカアー／＼とかハアー／＼とか云ふのは夢中で申すのですが今度は分ッて話すのです「坊ッちやん此地にお出で」と云ば「厭や」と云て自分の思ふことを外に現はすことが出きる樣になる取りも直さず話しが精神の符調となつて口に出ます斯うなれば最早赤子ではありません御小兒樣と云て宜しいが丁度一年半か二年位の時であります。

其上になれば小供の精神の向て居る所は食物と遊びだけです食慾は天性具ッたもので獸でも植物でも物を食すると云ふこと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は致しますが遊びと云ふとは人間の精神を育る上に於て大切のものであり升小供も大層に遊びハ好みます鞠を持て行くとかオシヤぶりを持て行くとか色の替ッたものとか形の替ッたものは大變に悦びます其悅ぶのは精神上餘程宜しきとで赤子がオシヤブリを持て居るにしても味を試みたり轉したり色々の試驗をして居り升立派の學者が生理を試驗するなど丶矢張同じとであつて是れを御師匠なしに學んで居るのです只其精神の向ふ所は目の前に在るものだけを喜ぶので年の長じたる上は空氣は何に風は何と無形の究理にも及びますが小供ハ眼前に横るものでなければ穿鑿するとを致しません。（未完）

批評

(62)　女子敎育論　（中本一册（百四十八頁）正價四十錢　發兌所東京牛込通寺町政典集誌社）

此書は白耳義の經濟學者ボーリユ氏の原著を保野時中氏が反譯せられたるものなり全卷を分ちて二篇とし第一篇には主として勞働社會の女子の敎育を論じ其第一章には敎育改良の必要なる事其第二章には勞働社會の女子の現況とこれより起る害惡とを記し其第三章には改良敎育の利益宏大なる事を說きたり別段の新說はなけれども女子の勞働は室家の幸福に宜しからざるの一理は當今日本の急激なる女子職業論者が多く失念する所として有益の論なり。扨て第二篇には主として一般の女子の敎育を論じ引續いて第四章に現今の女子敎育の不完全より家族及社會の上に生ずる惡結果を說き第五章には其改良法を說き第六章にはこれより生ずる結果を說き第七章には改良法實行の覺悟を說きたり右第二篇中には第五章尤も出色の論あり一讀して尤も益する所ろならん。其他パスチア、トクウビル、シユルモン、エミールド、ラヴレー等諸氏の女子敎育論を少々づゝ拔譯して附錄と爲す」惣躰の文章眞面目にして而も流暢なり飛拔けて面白き議論なしと雖ども當今の時世には亦れ有益の文字なり。

○浮雲第二篇の襃貶　（其三）

忍月居士

浮雲中の一大欠點は（此大の字は關係的なり）畏懼と哀憐の情に乏しきに在り既に前にも言へる如く小說ハ自己の情欲に克能はさる者を撰ぶを以つて其才識器能の人に卓絕するにも拘らす行ふ所ハ正道に反するを以つて忽ちにして因果其身に及び不幸慘憺の結果を呈す是に於てハ讀者畏懼と哀憐との情を起す希臘の賢哲アリストテレス言へる有り畏懼と哀憐の情を惹起せしめ後ち復た其情を光潔にするを要すと眞に是れ千古

の金言にして小説の秘訣と謂ふ可し若し此の要訣を欠くときは覆載間に確定したる天然の法則あるを知らしむる能はす又此法則の信任は其眞心に存するとを悟らしむるを得ざる可し予ハ浮雲が此點に附て冷淡不注意なるを惜むなり余は浮雲が第何篇を以て終るやを知らずと雖も此篇は初段(エキスポジション)と終局(メタバース)との間に位する最も大切なる最も興味ある境遇轉變の塲なるとを知るなりペリペチーの主眼とする所は主人公の立身發達に在り、主人公の艱難零落に在り、主人公の、企圖或る障碍、讒言、嫉妬、嫌疑等に由り齟齬、破潰するに在り然らバ著者が手に唾きして片腰を抜き畢生の筆を逞ふするの中原はペリペチーに在り故に讀者をして畏懼と哀憐の情を起さしむるも亦たペリペチーに於て求めざる可からず然るに浮雲は此大切なる幕に於て此大切なる奇觀を棄てたるハ惜む可く痛む可し浮雲の此奇觀を欠きしハ主として人物の行爲其自然に愜はざると其普通の人情に副はざるとの二條件を備へざるに座す。

何を以て人物の所爲其自然に愜ハざると云ふ歟、篇中の一枚看版は文三がお勢孃の御意を伺ふに在り然るに此一枚看版に於て自然に愜はざるの事柄を發見したりそは他に非ず文三が「イッソ別れるものなら奇麗に別れませう今迄の事はスッカリ水に流して」云々の言ハ余其の何邊より由來せしを知るに苦しむなり種なくして忽然ピョコリと芽の腰胎せしを怪むなり成る程著者はお勢が言中に「自惚」云々の言を藉りて膏藥を張りしも其言ひ譯暗い／＼何となれば逢ふは別れの俚諺もある如く前に逢ふの原因なくんば後に別れるの結果なし昔日多少紛紜の痕跡無くんば今日水に流すの汚物なし彼の原因なく痕跡なくして此結果あり汚物あるは余が承知せんと欲して承知する能はざる所なり。

何を以て普通の人情に副はざると謂ふ歟、浮雲が人情を寫すハ理想上よりするときは完全にして缺くる所なし然れとも理想上の完全は往々實際上に反違するとあり小説は技術にして猶ほ法術、醫術の如し死刑は刑罰に必要なる要素を欠くとて廢死刑論を採用せんか實際施政上に於て飛んだ障害起らん腦病患者は此療治を以てすれば間違なしとて病理各論第何枚目のみを株守せバ意外の處より併發病起らん是れ理の活用と術の巧拙に關すればなり小説家即ち技藝家が人情を寫すに於ても亦た理想の活用と云ふことを忘却す可からず篇中昇が菊見の塲にて「フト何か思ひ出した樣で四面をキョロ／＼見廻し

た」と言が如き昇が文三に對して「吾輩一臂の力を貸てやらう橋渡しをしてやらうドーダお思召は」とさも惡〳〵しく鼻を高めて尊大の言を吐くが如き其他萬事の擧動毫も親切らしく見えざるは理想上に於ては圓滿なるも實際に於て大に副はざる所あり昇の性質と地位より考ふれば表面上は親切らしく見せ掛けるが當然なり又假令課長に逢ふもお勢母子の行衞所在の注視に拔り有る者ならんや是れ予が浮雲を目して(但し全躰にあらず或る一部分と知る可し)普通の人情に副はずと謂ふ所以なり。

猶强いて浮雲を非難すれば其文句の餘り氣取り過ぎるに在り著者は成る可く無駄口を避けんと欲し、アッサリやらかさんと欲し・隻言半句にも餘音を生ぜしめんと欲し却ッて氣障に傾きたり此文句を人に譬ふれば三馬の百馬鹿の隨一人通がる人に宛然たり。

古し鴻門の會樊噲項羽に無禮嘲詈を極む、項羽の短慮にして猶ほ且つ之を免す名古屋の行臺淺野長政太閤を罵りて狐憑となす、太閤の負嫌ひ猶ほ且つ之を放つ浮雲著者の大度なる余を以ッて無禮者と叱せざるは知る所なり況んや予の無禮の度は遙かに樊噲長政の下に在るに於てをや又況んや著者の器量遙かに項羽太閤の上に在るに於てをや。(完)

叢話

○からだの持方

加藤弘之述　社員筆記

からだの持方と云へば一寸分りにくいですが縱令ば道具の持方と云ふと同しことで道具と云ふものは持方によつて大變に好くもなり又惡るくもなります道具は使ひ方が肝腎ですからだも其通りからだを能く持てば丈夫になり反對に往けば惡るくなる然う云ふ積りです持方と云ッて手に持て上げると云ふ譯ではありません。

私の考に總て日本人はからだの持方が餘程にわるいだらうと思ひます日本人はからだの持方を知らんと思ひます西洋人などの樣にからだの持方が上手でないと思ひます上手で無いからからだが弱くなり病氣になり或は夭死すると云ふ樣なことになりますソレデからだの持方と云ふことは大變に衞生上に關係あることと思ふ其持方の重なることは何かと云ふに第一に飲食のことですソレから起臥の事其外總て今日の人間の仕事の上の心得方などですが此等に就て考ると誠に日本人の一躰の有樣を云へば規則と云ふものが無いです不規則でシダラが無いので

す日本人でも重には男で御婦人の方にはシダラが無いのは男より少ない樣です其中には十分に心得てシダラの有る人もありますけれども無い人の方が多からうと思ひます飲食に就て第一ニ大切なることは三度食べる食事は時間を定めなければならぬ起臥するにも朝は何時頃夜は何時頃と毎日々々寸分違はぬとは往きませんが大抵定めなければならん其外學問とか運動とか或は其間の慰みのことか毎日の極りをつけて規則の紊れぬ樣ニしなければならんのですソレが日本人一般に規則が紊れて居ります食事の早い時も遲い時も時によつては澤山食べることもあり食べ過ぎるから腹が惡るくなつて其後は食べられない永く食べないから酷く腹が減る今度は大變に食べると云ふ樣なことがあり易い御婦人には少ないが男の酒を好むものなどは必ず酷いです酒を飲むのは食事と違ッて量りがないから分量を定めるとしても永く飲んだりすることになるから仕事も出きず自分の務むべきことも怠り其上に腸と胃を損ずる然う云ふことから臥起のことも不規則になり宵ッパリをしては朝寢をすると云ふ樣な鹽梅で何も乎も不規則になるからからだは次第に惡るくなるばかりです。

からだと云ふものは恰好道具器械の樣なもので人間の拵へる物よりは宜しいが人間の拵へた道具でも器械が能く整ッて十分に好く出きて居る道具程損じ易いものはありません器械の能く出きて居ると此上もなき我からだの持方を不規則にすれば洵に損じ易いです人間の拵へた込入た道具なれば始終氣を附て用ゐなければならぬが之を不規則にして少しも心を用ゐずに居れば如何です何でも道具には道具の持前があるから夫れを心得て注意して使へば十分に用を辨ずるがソレを一時むやみに使ッたり又ハ修繕すべき時に修繕もせずニ放り出したり不規則にすれば人間の造りたる道具でも損じて仕舞ます况して人間が飲食し起臥し又仕事を爲し心を娯ることを都合よく遣れば其からだも十分に持てる生れつき健康のものでなくともからだにシダラの無い樣にせぬときには大抵の身躰は持て行とが出きます生れつき弱いなれば極く長壽することは出きますまいが相應の長壽は出き升不規則ニすれば固とからだが然う云ふ風に出きて居らぬのですから何うしても弱くなります胃や腸も規則だつて食物を受けて消化しなければならぬ樣に出きて居る道具だがソレを受けられぬ程消化されぬ程一度に澤山食たり又時として腸胃に物が無くなつても其儘にして置たり酒を飲み過ぎたり甘いものを食過ぎたりすれば其道具の

〇釣瓶のあさがほ　　しのぶ

ひとりめさめて。をきいづる。なつのあしたは。すゞしけれ。
にわにかふとり。羽をたゝき。たかむらすゞめ。さわぐなり。」
てをけさげつゝ。
　たちいづる。
あさひはそらに。
　もれいでゝ。
つゆおくくさは。
　いろまさり。
しげる木の葉は。
　みどりなり。」
みづくまんとて。
　きて見れば。
かあいのハなは。
　手をあげて。
つりべいの柄に。
　まといつゝ。
こゝろもおかず。
　さきにける。」
けさをかぎりに。
　さくハなの。
ひとよをながく。
　おもひけん。
はかなきやどに。
　身をよせて。
いとうるはしく。
　わらふなり。」
とるにもたねず。うちゑみて。くちずさみつゝ。さりにける。
つゆのひぬまの。あさがほに。つりべとられて。もらいみづ。」

悪るくあることは分ッて居ります込入た器械とからだとは大抵同じことで夫れよりモット十分に出きて居るものゆへ尚々能く使はないと損じ易いものだからからだの持方をシダラあくすれば何んな丈夫のものでも悪るくあるより外ハありません。」

然しあがら前にも申す通り不規則なることハ男の方が多いです併し婦人でも自然其習慣に染て居る故婦人方でも決して十分規則だつて居ると云ふ譯には往きません御婦人は家を治むる者だから此道理を知てからだがシダラ無くては往かん規則だつ様に飲食のことも起臥のことも毎日の規則立つ様にとお分りにさへあつて居れば自然に男子を援けて其方に導いて往くとも出きる併し其道理を知らない時は然うするとも出きず男子の習慣に染ッて不規則シダラ無しに陷る様になります其他婦人は小供を育ると云ふとが一番六ヶしい務めで小供の手本になる所のものであります父君のからだの持方の能く無いのも悪るいが母君のシダラ無いには小供は一番早く染ります小供が學問をするとて態々机の側に座つた時は何も覺へられませんが親の爲すとを見て居て覺へ様とも思はずに覺へるとハ一番早いもので一番覺へ易いです親も教へ様ともせず子も習をふとせずに能く覺へる或は親はシダラ無いとが分つて子供は自分の様に習はぬ方が宜しいと思つて小供を叱つたりするともありませうが自分がシダラ無いとをして居て其小供にはシダラ無いとをしてあらんと叱つても夫れは無理でありまするし無理で無くても出きはしない八釜しく口で言ても出きぬとで何となく見て居るとが小供の教へになるのです夫れだからからだの持方のシダラ無いのは婦人でも男子でも其人一人の爲めに悪るいばかりではあい其育てらるゝ所の子が大害を引受る様になるのです。（未完）

○生　死　（下）

然れども死は果して萬事を終るべきか、氣息絶ゆるとき我れ則ち全滅せバ余は慷歎して止まじ若し此の暗路を經過して更らに出づべきの路ありと云ハゞ余ハ未だ望を失つて落膽するとを要せず。そも〳〵此の躰は余が躰なり我之を信ず此の手足は余が手足なり我亦た之を信ず此の骨肉毛髪は余が骨肉毛髪なり我亦た之を信ず、然れども此の五躰四肢骨肉毛髪は悉く余が所有するところにして我は能く此の天然の產を管理するを知る、故に我は五躰四肢骨肉毛髪にあらずして其の以外に我の存在するとを信ず。秋風蕭殺息氣絶するとき余の躰だ余の手足余の骨肉毛髪悉く腐化して塵芥となり塵芥化して

（一四）

氣とあり氣更に化して見る可らざるの無に歸するを知る然れども未だ嘗て我れの消散絶滅して余と離るゝを知らず往くものは余の躰なり其の一盛一衰我を增減するに足らず余は嘗て好顏の顏面を覆ひて年の老するとき之を脫しぬ余は嘗て骨肉の衣服を着けたり氣息の絶ゆるとき之を脫ぎぬ好顏去り五躰往きたり而して我は依然として存す。

余は嘗て渴きたることあり骨衰ろへ肉ゆるむ心氣濛々茫として夢の如し然れども盜泉の水の飮む可らざるを記臆せり、余は嘗て餓えたることあり肉落ち骨解け意氣慘刻冷として鬼の如し然れども首陽山の蕨薇は食ふ可らざるを記臆せり、凡そ如此く記臆するものありと云ふ余は其骨肉の外に凜然として存在する一つの王あるを認む。見るべし一笑國を傾くるの美人は只だ其面貌の窈窕たるを知る別に則ち傾國の邪心あるものあり、躰軀曲り鬚髮白く耳目すでに衰ろふ然れども老いて其の智德のます〳〵高きものあり、汝ぢ我が躰を縛すへし我が心を縛すべからずと云ひ、汝ぢ我が書を燒くべし我が信仰を奪ふ可らずと云ひ、白刄我が咽を刺すべし銃劔我が心を貫くべし我は則ち依然として存すと云ふものあり、余は此の如き人の骨肉の失するを見たり然れども未だ其骨肉外に存するものゝ失するを見ざるなり。

爛熳たる白花忽焉として落つ爽快の一日夢の如く去る夕陽落花を見て恨思もとより切なり然れども花の落つるは其の實の熟せんとするが故なり夕べの來るは朝たの將に來らんとするが故也往くものは實あり去るものは嗣あり然るを獨り吾れ人間に於て死万事を終るべけんや。

之を以て我は骨肉死すと云へども死せず我に生命あり此の生命や今日より延いて永遠に渡るの力を有す然れども若し之を養なつて之を活動せしめずんば生氣ありと雖ども發せず濛として睡るが如し我の本質即はち躰を有せず。

此故に我の世に存する若し骨肉に於て存せば骨肉の死すると共に死すべし我もし骨肉以外の生命に於て生きば骨肉死すると雖ども我は決して死せざるなり。伉儷の愛、事業の經營、只だ骨肉に屬するものか此等は即ち氣息の絶するとき則ち亦絶すべし、富貴利達權威名聲たゞ其の骨肉に屬するものか此等は亦た必らず骨肉と共に死すべし。然れども純潔の愛正義の德敬虔神を慕ふの信の如きは余れ皆な之を骨肉外の生命に於て行ひたり余は其の骨肉と共に絶滅することを信ぜざる也。

余もし肉に於て生くるか遂に死あらん余もし靈に於て生くる

か永遠に死なし晩鐘哀れを催うせども余は其の朝たに近づくを知る葉落ち花散ずれども余は其の春夏の將に來らんとするを知る　好顏去り軀躰曲り世壽略ぼ盡んとすれども余は骨肉の去て本我の甚はだ自由たらんとを喜ぶ余が行ひたる瑳々たる事業は新聞紙之を知らず然れども余は久しく之を記臆し得べきを喜ぶ余が友人余が父母同胞或は失せ或は死せんとす然れども余は之と永遠に相知るを得るの覺へあるを謝す。

諸君乞ふ生者の必滅するを憂ふる勿れ生者の能く生きざるとを憂へよ靈に於て積む所ろの寳、靈によつて獲たる利達は、永遠に失せず我之を抱き之を保有して永遠に存す治　亂　興廢盛　衰　起伏毫末も我は損せず我は永遠に存して永遠に通るもの也。

○百人一首一口話（二）

鈴木弘恭講
八木鶴吉記

持統天皇

春すぎて夏きにけらししろたへの衣ほすてふあまのかく山

此の御歌も萬葉集には。春すぎて夏きたるらし白栲の衣ほしたりあめのかぐ山。とありまして少し意が變ります。衣ほしたりは。衣ヲホシテアリといふこと。衣ほすてふは。衣ヲホストイフといふことでありますが新古今集にもかくほすてふとあります○けらしは。俗ケルサウナなり○しろたへは。白栲なり。古へは楮にて製したる糸を以て織りて衣となして庶民は常の衣とせり。其の色尤も白きゆゑに。是を白栲の衣といふたのであります○一首の意は。はや春が過ぎ去りて夏が來たさうな。夏になると庶民が白栲の衣を曝すといふがその衣を天の香山の邊に曝してあるよと詠み玉ひしなり。天香山は大和國の山なり。麓に埴安の池といふあり。此の池の堤の邊より眺望してよみ玉へるならむと萬葉集畧解にもいはれたり。當時は元嘉暦儀鳳暦なといふ暦を行ふと史上には見ゆれども。大かたは未だ暦を用ゐずして。四季の節物に賴りて春夏秋冬を知りたる風俗のさまも。此の御製の上に於て能く知られたり。氣を付て見玉ふべし。語格は。一段切の歌なり。夏きにけらしといふ所にて切れたり。此のにけらしは結辭なれども。上に指辭なきは徒の結といふ格であります。さて下は天の香山よ春過て夏がきたさうなと。また上へ打返して解す格にて。歌に此格は多くあります。

O Satisfy us early with Thy mercy, that we may rejoice and be glad all our days. — Psalm XC. 14.

小說

○小說神髓（第一篇）

蘇格氏著ケチルヲルス（第六回）

斯てデプトフホードに向ひ出發したるが途にて倫敦の都を過ぎ種々の藥を買求めて之を持參したり扨てもサッセックス侯の御邸に着しトレッセリアン先づ罷り出でゝ樣躰を伺ふに特の外の御疲勞にて此度は迚も世に存らふべしと思はず生前御身等に一應面會して樣々の事を申遺したくわざ〳〵召び寄せつるなりなど心細き物語りありトレッセリアンつら〳〵侯の樣躰を見又た其の日々の病狀を尋ぬるに彼のエーランドが申したると符合すること多く甚はだ不思議に思はるまゝ侯に告ぐるよう侯には抑も何如なることによりて斯る御病ひには罹り玉へる之に付きて最と不審に存じ候は私し近來の召使ひにてエーランドと申すものあり久しく或る煉金術士に從ひて其奇術を學びたるものゝよし妙なる醫術をも多少は心得て候ようなり既に先きの日にもラブサート老人が故なき病にかゝりて久しく煩らひ居たるを容易く診し視て一服の藥を盛りたるが夫にて頓かに本復いたしぬ而して侯より御使玉はりしとき傍はらに居合せて恐れ乍ら侯の御樣躰の樣を承知し左樣ならば之を醫やし參らすること難きにあらず何卒私しを召連れ玉ひ一度び御病躰を診するの藥を與へられたし早々に療治し奉らんと云へり餘り輕々しき申條に付一應は叱りも致したるが是非にとの懇望に付き召し連れ參りぬ而して今ま侯の御樣姿を見るにエーランドが細かに推察し奉りたるに露たがはざる所ろあり餘りに不思議と存じ候まゝ陽らはに御話し申すになんと云ふ、サッセックス侯打きゝて大に嗟歎し此度の病只事にはあらず之と云ふ病の元因に覺へはなけれどデメトリヤスと云ふ藥種屋より香料を買ひ之を食物に散らして食うべたるより即はち病とは成りぬ甚だウサンに思ひて彼の藥種屋を調べさしたるに今は行方知れず察するに敵のまはしものなりしやとも思はれたり今また考ふるに其のエーランドと云へるものも或は亦た別種の敵にてはなき乎少しく不審には思はるれども吾が病此の儘にしては到底本復しがたし試みの爲め其者の云ふまゝに服藥してんとて即ちエーランドを召し出し更らに一族家來を招いて傍はらに侍べらせ万一の折の用意にとて後の事共を細かに遺言し倘ほ我れに不幸の運ありとも敢てトレッセリアンを尤むる勿れ只だ〳〵一己の覺悟にて服藥するなりと辨じ扨てエーランドに向ひ汝或は敵の間者なるやも知

れず彼の藥種屋の藥のキヽメを全くせんが爲めに更らに余が身を毒するものにてあらばわれ今まは汝を取まく所ろの人多くあればきつと用心して藥を盛るべしと云ふにエーランドは少さか憚かる所なく拙技もし御本復の基ひとならば幸ひなりと云ふ顏付に少さかも疑はしき所なければ侯は更らに安んじて藥を服せんとす其時エーランドの申すようは殿之を召したるのちスヤ／＼として暫らく御眠りあるべし此時若し之を起し奉らば御命ちにも危うければ預かじめ此の妨げを爲さゞるよう皆々さまの御承知を乞ひたしと申しぬ茲は必要とあらば無論なりとて侯は其儘に藥を服す不思議なる哉其儘に睡氣を催うしがばと伏して殆んどたわひなし此時表てに聲ありて申入るゝよう女王陛下の御使ひとして醫侍某參上せり

佳傳

○レデー、ラッセル　*Lady Russel.*

「嗚呼神は我に此の妻を與へ玉へり其生れは貴く其家は富み而して其身は徳高くして才鋭く而かも我と感情を一にし此の危急の際に我に力を與ふ此の妻を神我に與へ玉へる其恩死すとも我豈にこれを忘れんや」とはこれレデー、ラッセルが良人なるベットフォルド公、ロルド、ラッセルが死に臨みて述たる言葉なり元來公は新敎の主義を以て人民の自由を伸張するを生涯の目的とせられしが時の英王チャレス二世の意に逆ひ入獄の身とはなりぬ或日万事の世話を爲さしむるためとて從者一人の附添を許せしに公は「我妻玆處に在り以て用に充つべし」と答へたりしが彼の有德なるサウサンプトン伯爵の娘君が可憐にも熱涙に溶かされて其傍に侍べり良人を慰め奉る樣を見る人皆感涙を催ふし百方救助の策を周せしも公が獨立の精神と民を愛する愛國心とこれに加るに智と勇と德もて固めたる志は最も危難なる反對者にして百計玆に至るも更に其功を見ずレデー、ラッセルも亦王の足下に拜伏して只管良人の赦罪を願しに少しも動く氣色なく處刑の日も愈近々となりたれば今は中々に其身の不幸を患ふるの暇なく只良人の廉く義に死し玉はんことを願ふの外はあらざりし左なきだに至誠一途の公爵には豫てより義に殉するの覺悟ありて只後に殘る妻子の歎き如何あらんとのみ煩ひ居たりしに今勇氣ある夫人の言葉を聞て最と安らけく歸するが如き思なして斷刀一片の霜と消るも消て地を濕ふすに足ると思へば却りて死出の旅路を急ぎしが只其妻に別るゝと肉を割くの思ありされば其妻に

別るゝの時「ア、死の苦は既に過ぎ去れり」と叫び神の此の如き妻を與へしを謝し勇ましく刑に就きぬこれ一千六百八十三年の七月にしてレデー、ラッセルが四十四才の時なりき夫人は此後其子女を敎育し其家を治むることをもて亡き良人に對する務と思ひ最と誠實に暮せしかば其の名は愈顯はれぬ。

夫人は一千六百三十六年を以て英國に生るトマス、リオセスリー伯爵の二女にして初めロルド、ハウファンに嫁し一千六百六十九年ウィリアム、ロルド、ラッセルに嫁したり（三十三歳の時なり）しが其歳良人より四歳も長けたりしにも拘らず一男二女を擧げ最と和樂なる伉儷なりしと云ふ夫人の性は或人の評せるが如く熱く和かなる情を以て知られたる人にして信仰厚く慮　遠く志　確くして且つ勇氣ある婦人なり若し夫人が生涯の來歷を述べなば詳かにこれを知り得べしと雖も今は時なく敢なく筆を茲に擱きてこれを後日に讓る看客これを諒して茲に譯出する夫人の手書一通を見玉ふて其一斑を窺ひ玉へ、

只今貴書拜見仕　誠實の御心根より切々懇々御書き寄せ被下候　事文面に溢れ嬉しく難　有御禮申　上候殊に縷々しく御申し諭し下され　候　御說拜見仕　妾等心の弱く信仰薄き徒をして奮ひ起さしめ大能の神に事ふの念を篤くせしむることゝ感服　仕　候　誠に神樣は限りもなく在しまして至善至愛に渡らせられ日に我等か道を供へ我等を導き玉ふ事誠に難有き限に御坐候妾か薄信なるにも拘らず過ぎし數年の間を思ひやれば幸に身も淸く保ち人の指をも受けず自づと心に滿つる快樂と最と嬉しき幸福を享け殊に人を愛し人に愛せられし事全く神の御恩と思へば誠に難有く嬉しき事中々此世に比ぶべきもの無之候　思へば此世の樂は酒に醉へるが如きものに候はずや暫しの樂しみに其身を忘るゝも醉增し來らば苦痛を感し醉醒めたれば夢の覺めたるが如く更に益なるなしこれを思へば嘗てウエレルの「凡て天に在る人達は歌ひつ愛し愛しつ歌ふ」と言ひし言葉は實に味ある事と覺へ候。

●寄書

○湘烟女史の詩

中島とし君橫濱へ移らるゝ時送られたる私書の端に一首を錄せらる左に寫して讀者の覽に供ふ

（上畧）此地は妹が家山にて非ざれど友人も少からず桑場の夕東台の曙も何となうなごりおしくて未練にも幾度となく首を回らしつゝ遂に住なれし家屋を他人に渡す事と相成候……先夜橫濱に泊せし際恰も大雨に會して思ひ候樣嗚呼此雨は橫濱に在るも東京に在るも常に愁を引起せしが愈一家橫濱に在住の身となれば初て樂しき聲がすると感ぜしとき一絕を得たり、

匆々舉家出帝城。他鄉却作返鄉情。閑窓春夢逢多雨。不似分襟昔日聲。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

居所は太田と申處故途多の字を用ひ候筆も紙も貧方付みぐるしき御許し御推讀可被下候　とし子

○感を記す　　　　（明治女學校）　太田きん子

殿本愛兄

一國の盛衰は道德の進退に因るものなり、抑も人の此世に生れたるや、皆一般に道德の心を備へたる故、萬物の靈長として禽獸に異なる所以なり、故に弱も優なるを以て强を挫き、小も正なるを以て大に勝ち、互に愛し互にたすけ、以て此世を渡るものなれハ貧富貴賤の別あるも誇るに足らず、恥ずるに足らす只々歡樂は共になすべきものにこそ、如何となれハ若し此世をして智識の世とせんか去らハ人ハオを得名望を得んが爲人を罔り人を嫉み又人に誇る様よからぬ懸を生して唯に詐僞を貴むの世となり邪へに道を守る人は其下に苦しめられ自然其蹟を斷たしむるに至らん去らハ富を貴むの世たらしめんか人々ハ身を轉んじて財を守り奢侈を好みて質撲を蔑みし利を貪りて義を忘れ世をして貪欲の最と狹きものとならしめ正直の人ハ朝夕饑餓に迫つて浮世の果敢なきをかこち望む所を失はしめん去らハ兵力を養ふて勇猛なる世とせんか人々干戈を好み腕力を貴み道德の風は天の一方に吹去らんのみ世ハ啻に牛馬を驅逐するの曠原に異ならずして毎に事多く平和の時ハなかるべし聖人をして空しく世の廢物となし徒らに山水の友ならしめん又老少婦女子ハ用なきものとなりて路傍にさまよふ外なかるべしされハ人と生れていと樂しと見る所の五官に觸るゝ造化主の美妙の華は咲けども見へず人爲優美の華ハ蕾めども咲くときぞなかるべし去らハ如何にしてか世を送らんか只輝やける愛の一字に如くものはなかるべし夫れ愛ハ萬の物を司どる智惠も力も富も榮へも是よりして起るものなり左れハ我國に行ハれし女の身の卑きは即ち力弱きものを蔑みする理りなれハ文明國より見る時ハ如何に愛薄くや見へぬらん又腕力世界のよふにも見へぬらんと顏もね上げぬ程恥かしくぞ思ふされハ世の女子よ己か身にまつ能く道德の基礎を立て愛を以て世の俗を化するこそ眞の勉ぞかし男の方々今迄我物顏の世の中に醜くきさまを顯へすハいとおとなげなき事なれ其責任ハ猶頂し勉めよや女勵めよや男。

古鄕梅　　　　井本秀子

色もかも見し世のはるにかわらしなわかふるさとの軒のうめか枝

梅風　　　　同

春の夜のゆめのなごりにうれどなくかをるもうれし梅のはつかせ

●新報

○東京產婆學校分校　同分校は本鄕區湯島切通坂町廿七番地に設置せられ目下生徒の募集中なり

○音樂學校　文部省の音樂卒業生徒の中にて今般府下に私立音樂學校を創設せんとて奔走計畫中なりと

○發育院慈善會　同會ハ上野公園內華族會館を借り受けて來る四月中旬櫻花の好時節に際して開場する都合に付き先達てより府廳の議事堂脇へ假事務所を設たり

○東京慈惠院　にては去る七日午後二時より幹事評議員の集會を催ふし近々皇后陛下の行啓あらせらるゝ準備並に來四月幹事改撰のとに付開議したり

○日本音樂會　同會にてハ去五日鹿鳴舘にて總會を開らき幹事より昨年中の事務會計を報告し次て役員を改撰せしに鍋島侯爵幹事長に當撰し蜂須賀侯爵以下九名幹事に再撰せり本年中の音樂會は四月十一月の兩度開くとに決したりと

○十三歲の產婆　京橋區木挽町四丁目九番地栁川久米吉の長女キク（十三年十ケ月）と云へるは豫て日本橋區藥研堀町產科醫櫻井郁次郎氏の門に入り產科術を研究し居りしが此の程卒業し去る八日府廳へ產婆營業免狀の下附を出願したりし由なるが斯る少年にて產婆の營業を出願せしは始てなりと

○產科往診　醫科大學第一醫院にては市內居住の貧婦產婦にして來診を乞ふものある時は晝夜を問はずこれに應ずるとと定めたり但し藥代の外には一切報酬等を要せずとのと

○大日本婦人敎育會の役員　本月三日の集會にて同會の役員を撰擧せしに理事に木村さだ子高橋きん子棚橋あや子議員に水野みね子師岡のぶ子小鹿島ふで子前島なか子宇川てつ子の諸氏が當撰せられたり

○東京裁縫館　今度黑崎信氏外數名が發起し東京裁縫館と云へるを設立し男女十四年より三十五年までの者に歐米風の裁縫を敎授するさ云ふ

○日本胞衣會社　今回發人社を改ため日本胞衣會社と稱し日本橋區北新町二番地に移轉し從前の如く營業すると云ふ

○儉厳會　婚禮の式は節儉にして祝賀を表せば可なり葬式も亦た儉約にして感衰を盡さば足れりとの主意にて上州高崎の有志者は題號の如き會を設け婚禮には親類の外に酒盃を出さず葬式には膳部を出さず其他品物の贈答は一切之を廢すると定め規則を設けて同盟者を募ると云ふ

○石卷港の女況　宮城縣下石卷には目下北畠道龍氏が頻りに佛敎を布說し居られ其信者は日々增し殊に氏に隨行の西卷かは子（二十三年）と云へるは尤も氏の敎を喜び當時石卷に婦人會を設ふけ一心布敎の事に盡力し居るよし此の婦人は横濱なる或る神學校にて七年間も修學し其學校の敎員となりしが一朝氏の敎を聞きて迷悟やしけん遂に氏に隨從して布敎に出掛るに至りしなりと當時婦人會の會員は百四五十名ありと云ふ但し西卷子の事は追て更に記すべし

○大阪慈善會　大阪鎭臺司令長官高島中將の發起にかゝる大阪慈善會は追々盛大に赴き既に會員二百十四五名も出來したるが其每月開らく例會に出席するものゝ少なきより此の程中將には自ら筆を取つて慈善會の主意及方法並に將校の夫人等は必らず入會せざるべからざるとを筆記し各會員に頒たれしとのとなり

○女子職業學校設立計畫　秋田にては有志者の發起にて同學校を設置せんとの計畫あるよし

○山陽英和女學校　備前國上道郡門田村の同校は今度一層の改頁を加へ英語を敎

(二〇)

授せんとて當時岡山へ在留の米人アルモナギール氏を聘するよし

○梅花女學校の紀念會　大阪西區土佐堀裏町なる同校は去月廿五日が創立十周年紀に當るを以て同日青年會館にてその紀念會を開きし由

○福岡婦人協會　去月十八日同會の例會を開かれ客員隈本有尙氏(西洋の小說)木戸麟氏(入鉢學產婦の衛生)榎本與七郎氏(神經の話)の講演あり出席員二十餘名なりしと

○道後女紅塲　伊豫國道後松ヶ枝町女紅塲ハ一月三十一日開業を執行し二月一日より開業したり

○敎育婦人會の創設　石見國鹿足郡津和野に於ては今度敎育婦人會と云ふを設け其發會を去月四日夜森村彌平次郎氏方にて開らき參會者五十五名にして室內衛生の責、空氣の話、婦人敎育の必要、新日本婦人處世の方向等の談話をなし自今每月二回づゝ開會するとに決せりと其主旨は婦人の道德を高め智識を硏くにありて會員は十五歲以上の婦人に限り每會々費一錢を持ち寄り其費用に充ると以ふ

○幼稚園設立の計畫　新潟にてハ幼稚園を設ふけんとて有志者の計畫中なりと

○松本婦人會　信州松本にて去月廿三日コルマ夫人の催しにて婦人會を同邸に開らき招請を受けて參會せしもの四十餘名ありしと

○女生徒の決心　高知縣土佐郡秦泉寺村山崎和章氏が實妹某子(十八)は幼少の時より學問を好み同地の小學校に入り早くも學科を卒業せし後ハ又高知尋常師範學校女子部の生徒となり目下勉强中なるが固より學問に心を置くとの深ければ都て外貌上の事に頓着するの暇あらず常に華美たる衣服を着るなどの事なく世間の女子が束髮よ何よと夢中になりて流行を競ふ傍にて髮は何時も只の藁杙髮にて居るとは是れさへ既に感ずべき事なるに此頃最早や年頃となりたれば諸方より緣談の事を云ひ込まるゝを兩親は相應しき向ならばと其事を某子に語るに某子ハ今の學校を卒業の後は是非とも東京に遊學するの積りゆゑ其の儀は幾重にも御容赦下されとて更に承引く色の見ねず兩親は何分とも左樣せんよりは斯樣と頻りに嫁入の事を勸め居たる處一日の朝起出で見れば某子は根元から髮をプッヽリ斷て居るより兩親は乍ちびッくりせしも追て其の決心の厚きを知り遂に東京留學の乞ひを聽せしかば某子は大きに喜びますく奮發して勉强中なりと聞く

○版權書目　二月中の官報にて報告せられし版權書籍の中女學に關する書目は左の如し

通俗家庭敎育論	二册	阪部廣貫
學校と家庭とのはなし	一枚	石塚德次郎
方言改良論	一册	靑田節
新撰唱歌集	一册	熊澤精愛
發音はやをしへ	一册	中川寬岡

●海外女事

○女子醫學校　米國のカナダに設けあるキングストン女子醫學大學校にての此頃の年回の報告によれば、卒業生中の二人は敎授となり同三人はキングストンにて開業し同一人はトロントに於て同一人はハミルトンに於て開業し更らに一人は西部の方にて業を開かんとし尙ほ一人は病院を監理して名あり其他の二人は印度に行て傳道す而して卒業生中たゞ一人丈けは過勞の爲めに死したり云々而して改選したる議員十五人の中には五夫人一令孃の名を見るなり

○婦女子選擧權　一月十九日華盛頓發電報に據れば華盛頓州外地方知事は婦女子に選擧權のを附與するとの議案に調印せりと云ふ(三月十二日官報)

○小供のはなし　(第六回)

○不思議の新衣裳　(下)

天皇は之を聞し召して特の外よ喜こび玉ひ左らば之より多くある諸司百官をかわるぐ遣わし彼の不思議の新織物を見せ申さんとて先づ何々卿何々書記官など云へるを一人一人送られたり然るよ此の人々は何れも皆な固より何物をも見得るよはあらねど若しも其實を吐き一物をも見候はざりきなど申したらんよは乍まち其職よ適せさるものと認められて早々よ其官を奪われんとの恐ろしさよ孰れも皆な總理大臣同樣のウソを述べ織物の色合工夫眞よ奇代の珍品なるよし交も言上したり天皇は左程よ珍しき織物を得るの喜こびに加へて朕が朝廷の百官はかく迄てよ皆な其任よ適するよな樂ひ哉樂ひ哉天下泰平極れりなど承知して心中只ならず喜ばれたるぞ哀れなり。

左れば天皇ひとりつらく思ひ玉ふよ之を裁して衣裳に制ら

ん前に朕も亦た一應之を見置くべしとて或る日彼の織殿へ行幸の事仰せ出させ卿輔太夫數多召し具して玆よ臨み玉ふ二人の織手は之れぞ一生懸命の塲合と覺悟し恭うやしく迎へ奉りて之れなるは何々の摸樣を寫し彼は何々の色合に似せたるものなど最と明細に分説す天皇優に御目をそゝいで之を見たまふに此はしなしたり機上に一物もなしアナヤ有司百官は皆な能く其任に適して朕は獨り其德を有せざる乎と大に驚ろき玉ひたるがサスガは万乘の君ビクとも爲玉はず靜かに落附きて鈴の如き御聲音にて善哉善哉汝ちの功勞莫大にて御感斜めならぬぞと仰せあるに取巻きて守護し參らする卿輔太夫皆な口をそろへて賞め立てたり斯て一人の近侍のすゝめに由り來る大祭の日に之を以て仕立てたる新衣裳を召し玉ひ下々庶民に拜覽の榮を與へ玉はゞ更らに一層の功德候はんとて則はち其の如く命じ玉ふ織手はかしこまりて劔を以て空を切り糸なき針にて空を縫ひ急がし氣にして其用意に着手したり。

扨ても當日と相成れば天皇下着を着けて待玉ふに織手は恭うやしく新衣裳と云へるものを捧げ來り之が下ばきにて候之が上衣にて候之れぞ長上衣にて候など一々に渡し奉りて玉躰に裝はせ申す哀れむべし天皇はメリヤスの儘にて馬に跨がり朕にこそ不思議の新衣裳は見へざれ汝ち庶民のうち凡そ其の職に適せん程のものは皆な之を見て定めし感歎いたすべしと密かにアキラメ玉ひ出御ある都の人民は兼ての評判に傳へきゝて今日は老幼壯少皆な道がわに平伏し恐る〳〵見上げ奉るに天皇白きモヽヒキ白きシヤツにてかひ〴〵しく手綱を取り高き帽子を戴きて嚴然身を反らせハイヨ〳〵と御意ありて馬を進ませ玉ふ然れど何人も其身を奇しみて絕て天皇の御衣裳を奇しむ者なく皆な靜まり反りて恐れ入る只だ傍はらに七八歲の童子も同じく拜覽してありしが最と頑是なく笑ひ出し見よ〳〵天子さまは下着のまゝでお出でなりと叫びたるに今まで堪へ居たる見物ども一同にドツト聲をあげて叫びたるがとは尙ほ新衣裳の立派なるとをほめたるにて候ひしとなり。

此ですから何でも正直にしないと間違ひを生じて大いなるハヂを受けます若し此の天皇を初じめとし一人でも正直な人があつて正直なとは何處までも直言したならバ天皇が斯る耻辱を受け遊ばすともなく又た莫大の金や絹を盜賊同樣の惡る者に奪ひ取らるゝ氣遣ひもなかりしならん夫故へお前方は何でも正直にしそして正直な事を言ふには少しも恐るゝとなくキツパリと之を言ひ又斷じて行はなければなりませんよ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○和文學講義

第十一回　鈴木弘恭述

次は終止言あれど是は上の加行の終止言の條にいへるが如く言も俗解も同じことなれば此所には俗解を省く

左行四段用格終止言
押す　落す　貸す　挿す　示す
成す　伏す　乾す　増す　召す

太行四段用格終止言
打つ　穿つ　勝つ　立つ　斷つ
放つ　待つ　滿つ　持つ　分つ

波行四段用格終止言
逢ふ　云ふ　追ふ　思ふ　買ふ
添ふ　問ふ　縫ふ　呼ふ　醉ふ

末行四段用格終止言
編む　忌む　倦む　好む　住む
進む　摘む　飲む　止む　讀む

良行四段用格終止言
入る　織る　送る　借る　切る
知る　散る　釣る　作る　降る

是等の類ありすべて此の終止言は第三の音に運用して自から切るゝ言をいふなり故に終止言ははも徒の結び言ありと知るべし

次は連躰言なれど是も上の加行の連躰言の條にいへるが如く言も俗解も同じことなれば此所には俗解を省く

左行四段用格連躰言
押す車　落す石　貸す本　挿す花　示す文
成す業　伏す犬　乾す布　増す客　召す使

太行四段用格連躰言
打つ馬　穿つ池　勝つ軍　立つ人　斷つ糸
放つ魚　待つ友　滿つ汐　持つ扇　分つ寶

波行四段用格連躰言
逢ふ父　云ふ恨　追ふ鳥　思ふ母　買ふ酒
添ふ水　問ふ詞　縫ふ衣　呼ふ兒　醉ふ男

末行四段用格連躰言
編む糸　忌む日　倦む業　好む遊　住む里
進む道　摘む草　飲む酒　止む風　讀む書

良行四段用格連躰言
入る風　織る機　送る客　借る馬　切る紙
知る顏　散る雪　釣る魚　作る舟　降る雨

是等の類あり是はすべて第四の音に運用して直ちに躰言（即ち名詞）に接續する言あれば續く性質の言なれども上にぞやかの何の指動詞ありてその結び言とある時は切るゝ格なり。然れども上にもいへるが如く。第三の音終止言と。此の第四の音連躰言とは紛れやすき言なれば能く注意すべし。假令ば車を押す石を落す本を貸す花を挿す文を示す業を成す犬が伏す布を乾す客が増す使を召す(以上加行)人を打つ池を穿つ軍に勝つ人が立つ糸を斷つ魚を放つ友を待つ汐が滿つ扇を持つ寶を分つ(以上太行)父に逢ふ恨を云ふ鳥を追ふ母を思ふ酒を買ふ水に添ふ詞を問ふ衣を縫ふ兒を呼ぶ男が醉ふ(以上波行)糸を編む日を忌む業に倦む遊を好む里に住む道を進む草を摘む

酒を飲む風が止む書を讀む(以上末行)風が入る機を織る客を送る馬を借る紙を切る顔を知る雪が散る魚を釣る舟を作る雨が降る(以上良行)あどいふ時の押す落す貸す打つ穿つ勝つ逢ふ云ふ追ふ編む忌む倦む入る織る送るの類ハ皆終止言なり。

上の加行連躰言の條中にも委しくいへるを參考して知るべし

次に已然言なれど是も上の加行の已然言の條にいへるが如く假りに此所に付屬する辭(てにをは)を添へて解せバその已然言あることが能く知らるべし左に揭出して是を示す

但しこれハ將然言の如く付屬する辭を添へずしては詞を成さずといふにはあらざれども此の五の音ハ同し詞にて希求使令言とあることあればそれ等の詞と區別せむがために今假りに辭を添へて俗解を示すなり

左行四段用格已然言

押せば 俗オスガヤアンコデ 押せど 俗オスガヤアナレド
押せども 俗オスガヤアナレドモ
落せば 俗落スガヤアンコデ 落せど 俗落スガヤアナレド
落せども 俗オトスガヤアナレドモ
貸せば 俗カスガヤアンコデ 貸せど 俗カスガヤアナレド
貸せども 俗カスガヤアナレドモ
挿せば 俗サスガヤアンコデ 挿せど 俗サスガヤアナレド
挿せども 俗サスガヤアナレドモ
示せば 俗示スガヤアンコデ 示せど 俗示スガヤアナレド
示せども 俗シメスガヤアナレドモ
成せば 俗ナスガヤアンコデ 成せど 俗ナスガヤアナレド
成せども 俗ナスガヤアナレドモ
伏せば 俗フスガヤアンコデ 伏せど 俗フスガヤアナレド
伏せども 俗フスガヤアナレドモ
乾せば 俗ホスガヤアンコデ 乾せど 俗ホスガヤアナレド
乾せども 俗ホスガヤアナレドモ
増せば 俗マスガヤアンコデ 増せど 俗マスガヤアナレド
増せども 俗マスガヤアナレドモ
召せば 俗メスガヤアンコデ 召せど 俗メスガヤアナレド
召せども 俗メスガヤアナレドモ

太行四段用格已然言

打てば 俗ウツガヤアンコデ 打てど 俗ウツガヤアナレド
打てども 俗ウツガヤアナンドモ
穿てば● 俗穿ツガヤアンコデ 穿てど 俗穿ツガヤアナレド
穿てども 俗ウガツガヤアナレドモ
勝てば 俗カツガヤアンコデ 勝てど 俗カツガヤアナレド
勝てども 俗カツガヤアナレドモ
立てば 俗タツガヤアンコデ 立てど 俗タツガヤアナレド
立てども 俗タツガヤアナレドモ
斷てば 俗タツガヤアンコデ 斷てど 俗タツガヤアナレド
斷てども 俗タツガヤアナレドモ
放てば 俗放ツガヤアンコデ 放てど 俗放ツガヤアナレド
放てども 俗ハナツガヤアナレドモ
待てば 俗マツガヤアンコデ 待てど 俗マツガヤアナレド
待てども 俗マツガヤアナレドモ

(未完)

(二)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

特別廣告

東京嬌風會錄事

一月中入會者の殘

山田能夫。金内婦美。小野寺千賀。粟屋榮。庵原柳。井上文代。富永ふん。中村淺葉。岳頭淺芽。石渡ひさ。梅澤ひで。淺井よき。田島ひで。海老名りん。森村しう。柴崎こう。辻まさ。町田ゑき。内城いさ。加藤鈴。縣祐。岩田登代。中田なか。

特別會員

竹尾忠男。三澤富之助。小原鉄臣。島村孝次郎。

二月中入會十六人

吉田登う。守井たみ。高橋たけ。野宮さた。佐野美津。三浦操。世良田曾代。梳田登め

特別會員

森眞太郎。伊藤眞成。宮崎秀顯。エムエ、スペンサー。メレーゼー、ホールブルク。リベカデ、ワットソン。メレーエ、バーンス。フランクデ、ソーパル。

廣告

交詢案内

●雇いたき方（甲）

一 機織 府下にて十二三より以上の女を數百人機織に雇いたし（神田紺屋町十一番地細原方）

●雇はれたき方（乙）

一 教師 師範學校女子部の卒業生にして府下の何方へか教授に行きたきものあり

二 畫師 洋畫の女教師と爲り得るものあり廿才前後時間多からずは女學校の教師となりたし

三 奉公 年頃廿一裁縫及び家庭の事を知る爲め無月給にて府下にて可成基督信徒の家へ雇はれたきものあり漢學英學も少し出來るなり

四 學婢 年齢五十七歳の婦人にして書畫歌琴三味線裁縫を心得居り女學校留守居様のものに雇はれたきものあり給料は已れを糊するだけにてよろし

五 學婢 學問篤志なれども學資に乏しく困窮する十四才の田舎娘にて讀書すべき余暇さへ得れば無給にて女學校などに雇はれたきものあり

六 奉公 地方師範學校卒業生にて學資に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學旁雇はれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし

交詢案内新設の事

女子に職業を與ふるとは當今甚いだ緊要と存じ候ところ世に在る慶安と云へるものには弊害勘らず又た高等の人々は周旋の便利すこしも無之甚はだ殘念と存ず因て吾社は此度餘暇を以て此等の人々の便利を闘り今後此の廣告欄内に交詢案内の一部を備え置き女子職業に就くの都合を計り度希望せり

交詢案内の規則

此案内は吾社員が餘暇を以て致すとゆえ手數料等は一切申受けざるは勿論なり左れば依頼の人々も決して催促がましきとを申越されざるよう豫め願置候事

女教員、うば、こしもと、奉公口、其外さま〴〵の女の職業に付き雇ひたしと思ふ人及び雇はれたしと思ふ人ともに其由を細かに申越さるべし吾社は之を次に記るす如き躰裁にして無名にしてたゞ番號を付し廣告すべき事

雇ひ主及び望み手は此の廣告を見て第何號の口へお世話ありたしなど勝手に申越さるべし左すれば吾社は其間に立ち双方へ申送り相談とゝのひたらば改めて此所に廣告して前の廣告を取消し尚ほ一つの女職の途を開きたるとを姉妹方と共に祝はふべき事

前申す如く手數料は一切要せざれども雇ひ主及び望み手の双方へ一應の問ひ合せと其後ち否やを返事するとにより少くとも三四回の郵便を出さずば相成まじ因て双方とも御依頼の初めに郵便切手拾錢を封入して頼み越されたき事。

交詢案内廣告の「ひながた」

●雇ひたき方（甲）

第一 教師 女の方にて年は何才位宅に來りて英學のリードル三位ひを教へて下さる方はなき乎尤も頼み手は東京三番町住

第二 うば 去る一月生れの女の子のうば年は三十程にて正直なる人あらば雇ひたし尤も頼み手は鹿兒島の櫻島にて

第三 下婢 田舎出の正直ものにて十五六の小女月給は一圓半位にて雇ひたし尤も頼手は東京富士見町

第四 髪結 仙臺地方へいろ〳〵の束髪の結ひ方を教へに來る女あらば雇ひたし尤も給金は十圓にて二ヶ月程

第五 お針 正直な老女にて五十程の人お針に雇ひたし尤も袴も仕立らるゝ人但し雇ひ先は西京住の華族也

●雇はれたき方（乙）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

第一 教員 ある女學校の卒業生十八才也毎日三時間ほど月給十圓以上にて英語英學の教授いたしたし心當東京にて

第二 學婢 學問篤志なれとも學資なくして困窮する田舍出の十六の娘若し諸書さへ出來ればなく奉公したしと云ふ

第三 字拾 是迄で或活版所の字拾を爲せし十三の小女越後迄へ參りたき緣あり新聞屋などにて需めはなきや

第四 下婢 年十四才なり正直のつもり越後生れされうも小間遣ひには成れる夜具衣服一通り持参給料二圓にて願う

第五 編輯 英語英學は普通女學の卒業生ほど出來米國へ三年留學したり何か編輯著作上にて依賴されたき方は御尋

●喜びの恵み

第一 乙第一は去月甲第一と相談まとまりたり

第二 乙第二は甲第三の宅にて信切に引取り介抱す

京橋區日吉町八番地
女學雜誌社

生徒募集廣告

入學申込ハ四月五日限

本校は女子の敎育に老練なる英國婦人及本邦人各數名を聘し完全なる女學を授くる所なり今般高燥絕景なる岡上に校舍を新築し四月上旬に開校し寄宿生通學生を募集す○本校は敢へて生徒の衆多なるを好まず歐洲敎育家の輿論に從ひ少數の人員を限り親切に敎授すべし○規則書入用の人ハ郵券二錢を送るべし

明治廿一年三月

麻布區永坂町一番地島津侯邸内
香蘭女學校

三月十日 團々珍聞 六三九號妙なり見てふ面白嘞き狂畵石版色摺大附錄有り

一册定價六錢府外郵稅一錢十册前金五十四錢

發行 東京神田 團々社

發兌					
一月。	七日	十四日	廿一日	廿八日	
二月。	四日	十一日	十八日	廿五日	
三月。	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
四月。	七日	十四日	廿一日	廿八日	

定價

一册。五錢 郵稅。一錢 (但府内無郵稅)

十册。四十八錢郵稅。十錢 (同前)

半年分 一圓十七錢 府外は 一圓四十三錢

一年分 二圓卅四錢 府外は 二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載するものに右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行 (廿七字詰) 一回 前金拾錢

同 三回以上 一割引

同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる物の廣告は本社の認識の上にて無代價にて引受く女學關係の書籍は一部寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町設々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新肴町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目廼明堂○同本郷四丁目文書堂○横濱住吉町角田尾眞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出居○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンぽード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版舍○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早迷社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大エ町新々堂○相州小田原緑町石叢堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年三月十五日印刷
明治二十一年三月十七日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷 東京下谷區仲徒町三丁目七十一番地 森田豐

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY